

○普及に移す技術

[タイトル] 「てんたかく」におけるカスミカメムシ類の効果的な薬剤防除法

[要約] 早生品種「てんたかく」におけるカスミカメムシ類の防除は、残効の長いスタークル、キラップの粉剤や液剤による適期 2 回防除を基本とし、割粃率が高く、カスミカメムシ類が多発生する年でも、雑草管理が適切であれば、斑点米の被害は防げる。また、微粒剤 F 体系は粒剤体系より防除効果が高い。

[キーワード] 「てんたかく」、薬剤防除、残効、カスミカメムシ類、斑点米

[担当場所・課] 農林水産総合技術センター・農業研究所・病理昆虫課、同・栽培課、富山農林振興センター

[連絡先] 電話 076-429-5249

[背景・ねらい]

水田内の斑点米カメムシ類の動向は、近年、カスミカメムシ類のアカヒゲホソミドリカスミカメ（アカヒゲ）に加え、アカスジカスミカメ（アカスジ）の発生量が多くなってきており、より的確な防除対策の実施が必要な状況にある。

そこで、早生品種「てんたかく」の斑点米発生リスクを低減するため、2 種のカスミカメムシ類に効果的な薬剤防除法を検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 防除薬剤のうち、スタークルとキラップは残効が長く、カスミカメムシ類が多発生する場合でも防除効果が高い（図 1）。
- 2 割粃率が高く、カスミカメムシ類が多発生する年（2015 年）でも、雑草管理が適切であれば、スタークル、キラップによる穂揃期と穂揃期 7 日後の 2 回防除で、斑点米の被害は防げる（図 2）。
- 3 微粒剤 F 体系は粒剤体系より防除効果が高い（図 3）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 雑草管理および適切な薬剤防除は、地域が一体となって取り組む。
- 2 薬剤防除の効果を得るには、防除適期に、所定の濃度の薬剤を規定量処理する必要がある。
- 3 微粒剤 F は、粉剤よりドリフトが非常に少ない剤型である。散布に際しては、専用のホースを用い、事前に開度等の調節を行う。
- 4 割れ粃が生じ、幼虫が増加する時期である出穂 17～20 日後（2 回目防除の 7 日後頃）に水田内すくい取り調査を行い、カメムシ類を確認した場合、直ちに追加防除を実施する（参考図 1，2）。

[具体的データ]

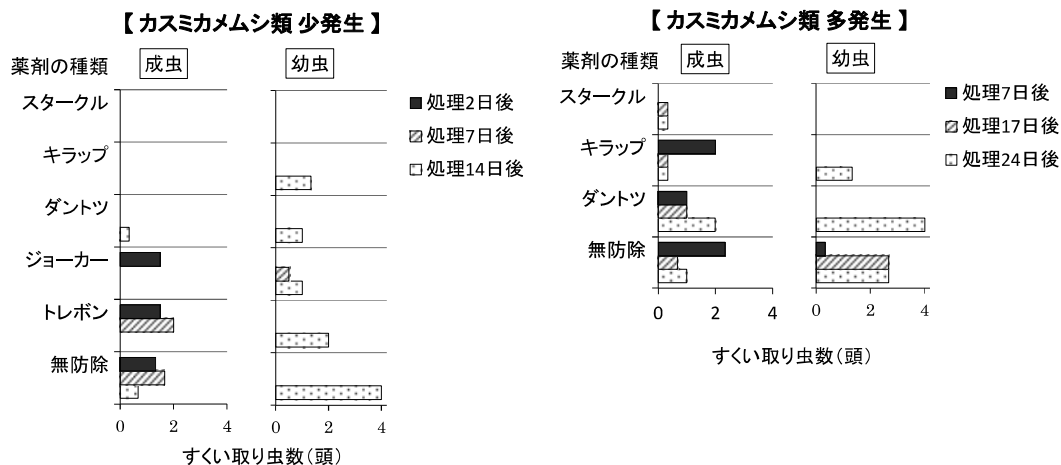


図1 薬剤の種類による残効等防除効果 (2013~2014)
※粉剤または液剤の穂揃期1回防除。
※カスミカメムシ類少発生のダントツは粉剤。それ以外は液剤。

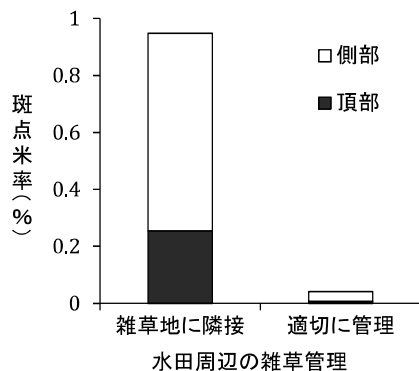


図2 割れ籾およびカスミカメムシ類多発生年における雑草管理による防除効果 (2015)
※スタークル、キラップの適期2回防除。
※適切に管理：畦畔や雑草地にイネ科雑草が出穂しないように管理すること。

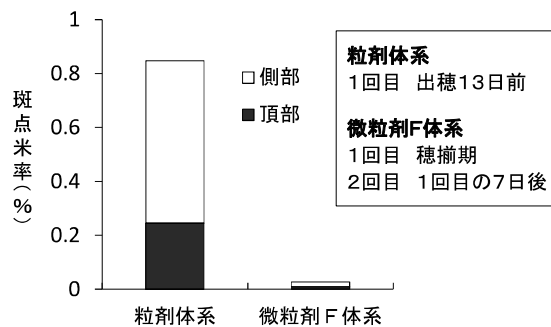
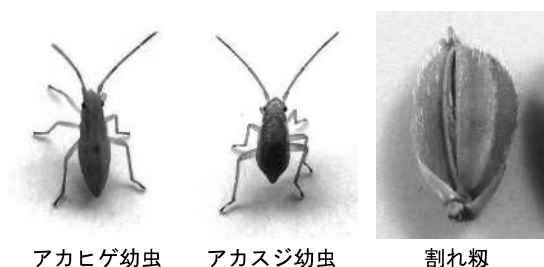
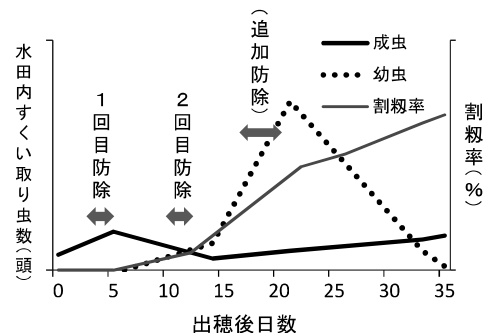


図3 割れ籾およびカスミカメムシ類多発生年における粒剤体系と微粒剤F体系の防除効果 (2015)
※スタークルまたはキラップを使用。
※現地ほ場。



参考図1 カスミカメムシ類の幼虫と割れ籾 (2015)



参考図2 水田内のカスミカメムシ類および割れ籾の発生推移と防除適期 (2014~2015)
※すくい取り虫数は無防除田、割れ率はポット試験のデータより作図。

[その他]

研究課題名：主要病害虫の薬剤防除法、アカスジカスミカメの防除方法確立試験
予 算 区 分：他委（新農薬実用化試験）、県単
研究期間：他委（2013~2014年度）、県単（2014~2016年度）
研究担当者：西島裕恵・野村幹雄・蛭谷朋佳（富山農振セ）・青山政義・大窪延幸
発表論文等：なし